専用住宅の門外または玄関前の植物の配置状況について

Plant Arrangement in Front of the House Entrance or Gate

権 孝姫* 松尾 英輔* 高藤 博之*
Hyojung KWEON Eisuke MATSUO Hiroyuki TAKAHUJI

摘要：住宅の門または玄関は住居の‘うち’と‘そと’を仕切る境界でありながら、道という公的領域と家という私的領域をつなぐ大切な役割を果たしている。本研究では、戸建て住宅を対象に、門または玄関における植物の配置の実態を把握し、住宅の外についての意識とその変化を探って、今後の戸建て住宅の外側の計画・設計の基礎的資料を得ることを目的とした。庭がない場合は、玄関が道路に接していても、多くの住宅が植物を玄関前に配していたが、庭がある場合は、門外にはあまり植物を配していなかった。しかし、戸建て住宅団地では、庭があるにもかかわらず、門外に植物を配する住宅の割合が高かった。また、戸建て住宅団地のほうが、そうではない住宅地より早く門外に植物の植込み場所を設置しはじめたことがわかった。

1. はじめに

日本の戸建て住宅は、ほとんどの場合、四方が塀で囲まれており、外から邸内の植物を覗くのは難しい。しかし、近年は庭のなかだけではなく、外にも植物をみせる工夫をしている住宅をみかけるようになった。特に、庭と塀がなく玄関が門の役割をしている住宅では、玄関前や軒下に植物をおく例がよくみかけられる。また、庭と塀がある場合にも門や塀の外に植物をおく住宅が増えている。

都市域での住宅の庭などの私的空間は、その居住者に恩恵を与えるだけではなく、街並みの景観や住宅地の環境形成の面で重要な意味をもっている¹⁾。住宅における私的空間に関する研究は、庭園に植栽された植物²⁾³⁾、庭の空間構成⁴⁾⁵⁾⁶⁾、庭空間の公的緑地環境形成⁷⁾⁸⁾、ベランダ利用⁹⁾、塀の形態¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾、生垣¹³⁾などさまざまな角度から行われてきた。しかし、住居のうちにそとをしきる境界でありながら、道という公的領域と家という私的領域をつなぐ大切な役割を果たしている住宅のアプローチ、すなわち門のまわりに関する研究はきわめて少ない。

そこで本研究では、私的空間に属しているが、公的空間をつなぐ道路側に接したところである戸建て住宅の玄関前または門外の植物の有無およびその置き方の実態を調査して、その類型および特徴について分析を行い、住宅の外についての住民の意識とその変化を探ることで、戸建て住宅の外側の植栽計画・設計のための基本的情報を得ようと試みた。

2. 調査方法

本稿では、住宅地の表層の構成要素の一つである植物に主眼をおいて、植物の配置という視点から分析を行って、日本の専用住宅において、植物に関わる表層の一般的特性をつかもうとした。

まず、「専用住宅」や「戸建て住宅」の定義を行ったうえで、戸建て住宅地を「戸建て住宅団地」と「戸建て住宅街」に分類して現地調査を行った。植物に関わる表層の一般的特性を把握するために、全国的な範囲で、専用住宅の門または玄関の外側に置かれた植物の有無を調べ、それを調査地域の特性によってどのような違いがあるかを分析した。

次に戸建て住宅を対象にし、門外の植物を「鉢に植えた植物(鉢物)」と「花壇のように植物を地植えする場所を設けて植えられた植物(植込み)」に分類して、計画的に建てられた団地とそ

うではない地域とで門外に対する関心の程度がどうかを分析した。戸建て住宅地を対象にした調査は、範囲を福岡市および周辺都市と設定したが、これは全国的な調査を分析した結果、都市間・都道府県間の差がほとんどなかったからである。

専用住宅―戸建て住宅団地―戸建て住宅街の順序で調査を行ったのは、専用住宅の調査で、植物に関わる表層の一般的特性を明らかにしたうえで、戸建て住宅地の植物に関わる表層の変化をみるためである。また、戸建て住宅団地と戸建て住宅街を比較することで、その変化の原因を求めようとした。

(1) 研究対象の定義

本研究では、「専用住宅」を「住宅の色々な形態のなかで、純粋に住居だけのための住宅」と定義した。しかし、本稿で「専用住宅」と定義しているものには、マンション、アパートなどの集合住宅は含まれていない。これは調査対象となった住宅の部分が地面の入口(門または玄関)であったからである。専用住宅を、庭があって、門―前庭―玄関の形式をもっている住宅と、庭がなく、道路に直接玄関が面している住宅に分類して調査した。

そして、「戸建て住宅」を「専用住宅のなかで、庭があって、門―前庭―玄関の形式をもっている住宅」と定義した。また、「戸建て住宅地」をその開発者が特定できるところから自然発生的なところかによって、「戸建て住宅団地」と「戸建て住宅街」に分類した。「戸建て住宅団地」は「都市の郊外に計画的に開発された住宅地」と定義した。戸建て住宅団地の分譲のしかたは、土地のみ分譲して注文住宅を建てることと建売住宅を購入するなどがあるが、それは団地によって異なっているし、一つの団地の中でも注文住宅と建売住宅が混在している場合もあって、区分が困難であるので、本研究では考慮していない。そして、「都心部に比較的近く、計画的に開発されていない、自然発生的な住宅地」

表－1 専用住宅における門外と玄関前の植物の調査表

		庭		小計	専用住宅 以外
		有	無		
門外または 玄関前の植物	有	A	B	A+B	J
	無	C	D	C+D	
小計		A+C	B+D	I (A+B+C+D)	I+J

*九州大学大学院生物資源環境科学府

を、本研究では便利上「戸建て住宅街」と定義する。

(2) 調査地点の空間的範囲

全国の専用住宅を対象にした調査では、それぞれの調査地において表-1のような調査表を1枚ずつ作成した。調査地点は無作為に選定して、調査は行政区域の丁ごとに行った。福岡市および周辺都市の戸建て住宅団地を対象にした調査では、門外の植物の有無および配置形態についての調査表を、専用住宅の調査と同様に、それぞれの団地で1枚ずつ作成した。そして、福岡市の戸建て住宅街を対象にした調査では、調査地を分けずに、一つの調査地としてまとめた。

(3) 門外と玄関前の植物

1994年から2000年に、28都府県にわたる247の調査地で行った。庭のある専用住宅（表-1，A+C）またはない専用住宅（B+D）が50戸を超えることを原則とした。当該地域の専用住宅以外（J）、たとえば商店、営業所、3階建て以上のビル、公共の建物、工場などについては、その戸数を調べ、調査地域の特性（専用住宅の多少）を判断する資料とした。当調査では、庭の有無と住宅の外に植物がおりてあるかどうかを調べた。

庭の有無は、約2坪（約7㎡）¹⁰以上の土地があって植物（鉢物または植込み）用として使われているか否かによって判定した。庭のない住宅では、玄関が直接道路に面している例が多かった。次に、道路側の、見える場所（庭がある住宅の場合：門外、厳密には塀や生垣の外を含む／庭のない住宅の場合：玄関前、軒下を含む建物の周囲）に鉢物または植込みの植物があるかどうかを調べた。

(4) 戸建て住宅団地における門外の植物

2000年4-7月に、福岡市および周辺都市の戸建て住宅地で行った。調査地域は、都市の郊外に計画的に開発された「戸建て住宅団地」を対象にした。

福岡市および周辺都市の戸建て住宅団地50カ所（表-2）を対象に、門外に植物があるかどうかを調べて、ある場合には、それが鉢物が植込みの植物（以下、植込み）かを調査した。調査地点は無作為に選び、調査数は、門外に植物のある住宅またはない住宅が50戸を超えることを原則とした。戸建て住宅地の住宅にはすべて庭があった。また、調査した戸建て住宅団地の開発年度、団地全体の面積、団地全体の戸数などは、市役所の都市計画課な

どの資料に基づいたものである。

(5) 戸建て住宅街における門外の植物

2000年4-11月、福岡市で行った。対象とした住宅は、都心部に比較的近く、計画的に開発されていない、戸建て住宅街のなかで、庭があって、門外に植物の植込みの場所を設けている住宅である。調査した戸数は102戸、調査内容は植物の植込みの場所をいつ設置したかである。この調査結果を、地域別に分析するには、門外に植物の植込みの場所をもっている住宅の数が少なかったため、地域に関係なく全体でまとめた。

3. 専用住宅における門外と玄関前の植物について

(1) 門外または玄関前の植物の有無による住宅の類型

本調査では、住宅は庭の有無および門外または玄関前の植物の有無によって、A：庭があって門外に植物を配している住宅、B：庭がなくて玄関前に植物を配している住宅、C：庭があって門外に植物を配していない住宅、D：庭がなくて玄関前に植物を配していない住宅の四つに類型化された。

調査した全地点の結果をまとめると、庭があって門外に植物を配している住宅（A）は全体の6.8%、庭がなくて玄関前に植物を配している住宅（B）は全体の39.4%、庭があって門外に植物を配していない住宅（C）は46.0%、そして庭がなくて玄関前に植物を配していない住宅（D）は全体の7.8%であった。

庭がある住宅（A+C）とない住宅（B+D）は、52.8%と47.2%でほぼ半々の割合である。また、門外または玄関前に植物がある住宅（A+B）は46.2%、植物のない住宅（C+D）は53.8%である。庭がある住宅は門の外に植物を配しておらず、庭がない住宅では玄関前に植物を置く割合が高い傾向がみられた。

(2) 調査地域の特性との関係

調査地域のなかで庭のある住宅の割合を、調査地域の特性をあらわす指標とみなして分析した結果、調査地域の特性によって、住宅の門外または玄関前に植物のある割合はかなり異なることがわかった（図-1）。すなわち、調査地域に庭のある住宅の割合が低いほど、門外または玄関前に植物を配する割合が高くなる。また逆に、庭のある住宅の割合が高くなるほど、植物をおく割合が低かった。

庭のある住宅とない住宅を分けてみると、庭をもっている住宅

表-2 調査対象となった戸建て住宅団地

団地名	調査地	開発年度	調査戸数	団地名	調査地	開発年度	調査戸数
松崎団地	福岡市東区若宮4丁目	1974	108	葉光台団地	筑紫野市	1989-1991	163
松崎団地	福岡市東区舞松原2-3丁目	1974	110	ちくし台団地	筑紫野市筑紫	1974	170
八田団地	福岡市東区八田2-3丁目	1988	92	桜台団地	筑紫野市桜台2丁目	1970	167
東区大字香椎	福岡市東区香椎台1丁目	1981	85	筑紫駅前団地	筑紫野市筑紫駅前通	1984-1988	186
高美台団地	福岡市東区高美台1丁目	1979	111	三条台団地	太宰府市三条2丁目	1971	107
美和台団地	福岡市東区美和台1丁目	1991	118	大原団地	太宰府市三条3丁目	1975	120
新宮渡坂団地	福岡市東区渡坂	1990	107	石橋台団地	粕屋郡石橋台	1982	187
小郡・筑紫野ニュータウン	筑紫野市光が丘5丁目	1983-2000	93	長清台団地	太宰府市長清台3丁目	1971	130
小郡・筑紫野ニュータウン	筑紫野市光が丘4丁目	1983-2001	123	長清台団地	太宰府市長清台1丁目	1972	140
光ヶ丘団地	筑紫野市光が丘2丁目	1982-1992	58	都府桜団地	太宰府市都府桜南4丁目	1970	172
光ヶ丘団地	筑紫野市光が丘1丁目	1983-1992	109	東が丘団地	太宰府市青山1-2丁目	1972	153
美しが丘団地	筑紫野市美しが丘北2丁目	1990	57	泉ヶ丘・グリーンハイツ	太宰府市梅香苑2,4丁目	1976	150
美しが丘団地	筑紫野市美しが丘北3丁目	1990	74	梅香苑団地	太宰府市梅香苑1丁目	1975	117
みかさ台団地	筑紫野市みかさ台	1979	75	墨ヶ丘団地	太宰府市青山2丁目	1972	162
都坂団地	筑紫野市都坂	2000	92	湯の谷南団地	太宰府市石坂3丁目	1965	122
富の森団地	筑紫野市富の森	1973	136	観世団地	太宰府市観世寺	1968	150
桜ヶ丘団地	粕屋郡志免町桜丘南	1977	65	国分団地	太宰府市国分5丁目	1968	139
桜ヶ丘団地	粕屋郡志免町桜丘4-5丁目	1974	141	水城台団地	太宰府市水城5丁目	1969	161
三国野団地	小郡市三国丘	1995	153	南ヶ丘団地	大野城市南ヶ丘3,7丁目	1969	180
三国丘団地（西鉄）	小郡市三国丘	1995	208	つつじヶ丘団地	大野城市つつじヶ丘2丁目	1972	134
むさしが丘団地	筑紫野市むさしが丘2-3丁目	1973	171	つつじヶ丘団地	大野城市つつじヶ丘4,5丁目	1996	142
天拝坂団地	筑紫野市天拝坂1丁目	1995	169	平野団地	大野城市平野台1丁目	1971	140
天拝坂団地	筑紫野市天拝坂4丁目	1987	125	緑ヶ丘団地	大野城市緑ヶ丘1-2丁目	1972	167
南ヶ丘団地	大野城市南ヶ丘2丁目	1968	142	月の浦団地	大野城市月の浦	1996	125
高雄台団地	太宰府市高雄4-6丁目	1972	175		大野城市若草1-2丁目	1995	159

図-1 庭のある住宅の割合 ($A+C/1+J$) と門外または玄関前に植物がある住宅の割合 ($A+B/I$) との関係 (○で囲んだところは戸建て住宅団地であった)

図-2 庭のある場合と庭のない場合に植物を有する住宅の割合 (○で囲んだところは戸建て住宅団地であった)

図-3 戸建て住宅団地の開発年度と門外に植込み場所を設けている住宅の割合との関係

はその地域が庭がある住宅の割合が高いところであるか低いところであるかにかかわらず、門の外に植物がない (図-2)。これに対して、庭がない住宅の場合は、庭のある住宅の割合のいかにかかわらず、60%以上が玄関前に植物を配している。

ところが、図-1、2 に○で囲んだ調査地では、上記とは異なる結果がみられた。すなわち、庭がある住宅の割合がきわめて高いにもかかわらず、門外または玄関前に植物を配する割合が高い。これらの調査地は、すべてが戸建て住宅団地であった。

4. 戸建て住宅団地において門外の植物

調査した福岡市および周辺都市の戸建て住宅団地は、すべてが

計画的に戸建て住宅のため開発されたところで、もっとも古いのは1965年開発されていた。調査した戸建て住宅団地では、ほとんどの建物が専用住宅で、庭をもっている。ほとんどの調査地で40%以上の住宅が門外に植物をおいていた。

(1) 門外の植物の種類

本調査では戸建て住宅団地の住宅を、門外に植物がない場合 (a)、植物がある場合には、それが鉢物である場合 (b)、植込みのものである場合 (c)、そして鉢物・植込みが両方ともある場合 (d) の四つの類型に分けて調べた。

調査地点の全体でみると、戸建て住宅全体では植物がない住宅 (a) は27.4%、鉢物だけがある住宅 (b) は13.3%、植込みだけがある住宅 (c) は38.5%、そして鉢物・植込みが両方ある住宅 (d) は20.8%である。図-1 でみたように、専用住宅全体の調査結果では、約5割が門外または玄関前に植物を置いているのに対して、戸建て住宅団地では、約7割の住宅が門外に植物を置いていることは興味深い。

(2) 植物の植込み場所について

戸建て住宅団地の門外の植物を、鉢物と門外に設置された植込み場所に植えられた植物との2類型に分けて分析した結果、鉢物の住宅より植込みの住宅の割合が高かった。

1960年代から1970年代に開発された戸建て住宅団地では、30%以上の住宅で門外に植物を植える場所を設けている (図-3)。1980年代ごろから開発された戸建て住宅地の中には、大部分が門外に植物を植える場所を設けている戸建て住宅団地がある一方、その割合が20%前後と低いところもある。

5. 戸建て住宅街において門外の植物植込みの場所

福岡市および周辺都市の、団地ではない戸建て住宅街で、門外に植込み場所がある住宅について、植込み場所の設置年度を調べた結果と戸建て住宅の着工数を比較してみると、戸建て住宅の着工数は1970年代から減ってきたことに対して、植込み場所の設置は1970年代後半から徐々に増えてきたことがわかる (図-4)。戸建て住宅団地では、1960年代に開発された団地でも約35%以上の住宅で植込み場所を設けているが (図-3)、戸建て住宅街では1974年以前に植込み場所を設置した住宅はなかった。

6. 考察

戸建て住宅全体を対象にした調査結果をみると、住宅外部から

図-4 戸建て住宅街の住宅で門外に植込み場所がある住宅数と戸建て住宅着工の推移 (3年単位でまとめた結果)

*戸建て住宅着工の推移は「建設白書 (H11) (建設省編)」による

みられるところ、すなわち道路沿いに植物を配するかどうかは、庭の有無によってかなり異なることがわかった。庭のある住宅では、住宅の外にあまり植物を配しないが、庭のない場合は、多くの住宅で外に植物を配している。庭のある住宅では、庭に庭木を植えたり鉢物を置いたりして庭づくりを楽しめるので、外にまで植物を置かなくても植物を育てる空間的な余裕があるからであろう。これに対して、庭のない住宅では、その空間的な余裕がないから、庭づくりの一つの手段として私的空間ではない場所にも植物を置かざるを得ないとも考えられる。

文化・歴史的な面から説明しようとした槇らによると¹⁶⁾、日本の都市の住宅は、お屋敷型、町家型、裏長屋型、そして郊外住宅型の四つのタイプに分けられる。このなかで町家型は本来店舗併用住宅であるから、専用住宅とはいえないので、本論文では専用住宅であるお屋敷型、裏長屋型、郊外住宅型について論じる。これらのなかで、郊外住宅型はお屋敷型、裏長屋型と比べると出現した時代がかなり新しい¹⁶⁾。

お屋敷型は本研究の庭がある住宅に、裏長屋は庭がない住宅に対応する。お屋敷型に対応する庭のある住宅は塀に囲まれ、塀の内側に庭があるので、門外にはあまり植物を置いていないが、裏長屋型に対応する庭のない住宅の場合は、裏長屋で住宅の前に路地に植物などを置いていたように、私的空間の外である玄関前に植物を置いていた。

このような傾向とは違う特性をもっているところが、図-1、2の○で囲んだ戸建て住宅団地である。戸建て住宅団地の住宅は、表-2で説明しているように、郊外住宅型に対応して、「ミニお屋敷」ともいえる。これは塀があって、門-前庭-玄関という構成を型として持っているが、規模が小さいため、従来のお屋敷とは違う特性を現している。ミニ化したお屋敷型は、お屋敷型ほどよそよそしくはなく、裏長屋ほど親密な近隣関係でもない¹⁶⁾ 中間的な型ともいえる。

戸建て住宅団地ではかなり高い割合の住宅が門外に植物を配していたが、これは戸建て住宅団地の住宅で現れている裏長屋的な要素かも知れないし、植物を媒体として形成された、適当に親密な近隣関係の表れ方ともいえよう。もちろん、戸建て住宅団地の

住宅がすべて狭い敷地で建てられているわけではないので、この考え方を確実に裏付けるためには、今後一戸の面積と植物を配する住宅の割合との関係を検討する必要がある。

戸建て住宅団地で門外に植物の植込み場所を設けている住宅の開発年度(図-3)と、戸建て住宅街の住宅で植込み場所を設置した年度(図-4)を比較してみると、戸建て住宅団地のほうがやや早いことがわかる。ただし、これは戸建て住宅団地の開発年度と戸建て住宅街の住宅が植込み場所を設置した年度との直接的な比較であるから、団地が開発された後、古くなった住宅を建替えたり、リニューアルした場合には比較が成立しない。

とはいえ、1960年代後半に開発された戸建て住宅団地では、40%以上の住宅が植込み場所を設けているが、これのすべてが建替えまたはリニューアルの時に設置された住宅であるとは考えられないことから、植物の植込み場所の設置は戸建て住宅団地のほうが早くから始まったとみられる。この点については古い戸建て住宅団地のリニューアル状況などを調査して確認したい。

また、戸建て住宅団地で1980年代以後に、90%以上の住宅が植込み場所を設けているところがあるが、このような団地では住宅を売出す時からすでに植込みの場所がつくられている場合も含まれている。

いずれにせよ、基本的に日本では、庭がある場合には門外に植物を置くことはなく、庭がないときには玄関前に植物を配してきた。ところが、戸建て住宅団地が開発されるようになると、庭があっても門外に植物を配するようになり、一般住宅地にもこの傾向が浸透してきた。これは、私的空間での植物の配置から、公的空間まで考えた植物の配置をするようになってきたことを示唆している。

今後の課題として住宅の敷地面積や方位、周辺の自然環境、地域的な違いなどとの関係についてもさらに分析を進めたい。また、戸建て住宅の住民の意識などについても検討が必要である。

謝辞：本研究の遂行にあたっては、福岡市、大野城市、小郡市、粕屋郡志免町、同宇美町の都市計画関係部局のご協力をいただき、一部には、(株)九州日観植物の助成を受けた。記して謝意を表する。

補注・文献

1) 川根あづさ・愛甲哲也・浅川昭一郎(2000): 北海道恵庭市恵み野を事例とした住民の庭づくりに対する意識と取り組みについて: ランドスケープ研究 63(5), 695-700	6) 宮城俊作(1993): 歴史的市街地における「にわ」を媒体とした空間構成単位の研究: 造園雑誌 57(2), 159-164	(2000): 戸建て住宅における塀の形態と住民意識に関する研究: ランドスケープ研究 63(5), 683-686
2) 中尾昌弘・服部保(1999): 三田市フラワータウンにおける戸建て住宅庭園の庭園植物の特色: ランドスケープ研究 62(5), 617-620	7) 上甫木昭春(1999): 新市街地の戸建て住宅地における庭空間への生き物誘引の実態と緑地環境形成との関係性: ランドスケープ研究 62(5), 643-646	12) 近藤公夫・前川京子(1970): 住宅敷地外囲工についての住居者意識-奈良市学園前住宅における事例研究-: 造園雑誌 33(3), 37-38
3) 浅見佳世・中尾昌弘・服部保・武田義明・石田弘明(1998): 三田市フラワータウンにおける戸建て住宅庭園の植物相: 人と自然 9, 115-126	8) 上甫木昭春(1998): 居住環境形成に資する戸建て住宅地の庭空間の公的役割に関する研究: ランドスケープ研究 61(5), 793-796	13) 柳井重人・石井正一・丸田頼一(1993): 千葉県大原町におけるツバキを中心とした生垣の分布実態に関する研究: 造園雑誌 56(5), 277-282
4) 崔成圭・仲隆裕・藤井英二郎(1994): 海岸集落(富津市秋生)の空間構成とその植物の特性について: 造園雑誌 57(5), 253-258	9) 野口智美・仙田満・矢田努(2000): 園芸の視点よりみた集合住宅のベランダ利用に関する研究: ランドスケープ研究 63(5), 691-694	14) 本研究では予備観察に基づき、明らかに植物が植えられていて、それらを管理できるスペースも備わった最少面積が約2坪であるとみなした。
5) アリフィンハディスシロ・坂本圭児・千葉喬三(1998): インドネシアのホームガーデンの構造に及ぼす都市化の影響: ランドス	10) 黒川威人(1980): 街並景観における塀のデザイン研究1: 金沢美術工芸大学学報 24, 39-48	15) 建設省編(1980): 建設白書-平成11年版: 大蔵省印刷局, 551
	11) 井上加奈子・仙田満・矢田努・井上寿	16) 槇文彦・若月幸敏・大野秀敏・高谷時彦(1980): 見えがくれする都市: 鹿島出版会, 140-179

Summary: The major function of the house entrance is not only a boundary line between the house and the road, but also a space to intermediate between the privacy and the public. The purpose of the current paper was to discuss and clarify the thought background and the change by researching the plant arrangement in the house entrance or gate. When a garden is available, it is very rare that plants to be seen outside of the gate and/or the wall (including hedge) of the residence. However, in housing developments, houses decorated with plants outside of the gates and/or walls are high, though they are available to use their gardens. In the non-housing development, to make the planting-bed outside of the gate and/or the wall increased after late 1970's. The house of the non-development followed after ones of the development.